

四季と往く蒸気機関車

SLのすべて しんやかずお 新屋和夫写真集



冬

はじめに

登り勾配にさしかかると、重い荷を引いたS Lは荒々しく煙を吐き、レールを噛み、全身をふるいたたせて力闘する。助けてくれる者は誰もいない。すべてが自分ひとりの孤独な闘いの連続。それはあまりにも哀れなS Lの運命なのかも知れない。だが、いつも自分の力で行動し得ると言う事は、時にはまぶしい位に新鮮であり、うらやましい。

峠を登り切って坂を転がっていく姿は、ひたすら家路を急ぐ駄々っ子みたい。これほど喜怒哀楽を素直な態度でみせるヤツに、好感と興味を覚えずにはいられない私。

今ではもう日本の地から引退してしまい、走る姿を見る事ができなくなってしまった。そして写真では動く姿を見ることはできないかも知れない。

だが私の生命あるかぎり、甦り、走りつづけるであろう蒸気機関車。S L
そのS Lの四季折々の姿に目を通してくれる事は、この上ない喜びと感じる次第であります。

著 者

冬

○月×日。何回となく見て来た北海道の冬。うす暗い空に星がまだあった。宗谷本線名寄駅から分かれて、深名線の北母子里駅下車。

降りたのは私だけだった。鼻毛が凍りついてむずむずする。温度計が-15℃を指していた。駅舎の外に出ると、空気が凍って、登り始めた太陽の光に照しだされて、キラキラ飛んでいるのが見える。

快晴。実に空気がうまい。青空の中に思い出せないが、何かの形に似た雲がポツカリと浮んでいた。

目的地目指して歩き始める。右に左に山間をぬうようにして引かれている線路にそって歩く。しかし思うように

進まなかった。雪が足にからみ、行手をはばむ。雪道の5キロはとてもつらい。

途中でコーラの栓を抜く。のどにしみ渡り、夏に飲むのとは一味違う。

トンネルを越えると目的の場所があった。少し高い所へ登り線路を見下せば、眼下に広がる雪景色が一段と美しい。シャッターを押すばかりにセットして、じっと待つことしばし。

ふと横を見ると、動物の足跡らしいものが、生々しく点々と見えるではないか。私の手の平の4倍くらいはあるだろうか。どう考えても、熊の足跡としか思えなかった。



大カーブ

山水画

山あいにかかる橋

冬枯れ

山の彼方

冬の快走

牧場

S Lと鉄橋

流氷

凍てつく朝

冬の斜里岳

流氷の海

冬の峠道

大湿原

晴れ姿

南郷谷

日南の海

のどかな風景

山なみについて

利尻富士

冬景色

岬

冬の湿原を行くC 5 8

冬の日射しを浴びて

幸せ行きのS Lが行く



C 5 8 の走る冬の道

一番列車

羊蹄山のふもと S L が行く

行きの峠道

C 1 1 の正月

ワラブキ屋根

冬の海岸線

大雪原

硫黄山

客車列車

塩狩峠

雪の降る鉄路

霧進

湿地帯

会津冬景色

常紋峠

ふりしきる雪

朝に輝く

山間部

新線を走る D 5 1

渓谷を行く

峠の朝

峠越え

新屋の機関区



大カーブ

北海道 石北本線 美幌〜緋牛内
一条純白の煙を吐いてC58は力走する。満身の力をふりしぼりかけ抜けていった。



山水画

北海道 根室本線 別保〜上尾幌
まるで絵巻物の様な風景に北国のきびしきを見た。



山あいにかかる橋

九州 高森線 立野〜長陽

南郷谷にさし込む朝陽に照らし出されたC12がくつきり浮かぶ。



冬枯れ

北海道 根室本線 落石ノ別等賀
原始の世界へ行ったような錯覚を覚えた。
どんよりとした冬空の下C58は駆け抜けてゆく。



山の彼方

北海道 興浜北線 斜内〜目梨泊
はるか彼方に一条の白い煙が上がった。やっと来た。
待ちに待ったやつがやっと来た。



冬の快走

北海道 釧網本線 斜里〜中斜里
冬景色の中をC58がスイスイと生き物のように走り去ってゆく。



牧場

北海道 日高本線 日高三石〜蓬栄
サラブレッドが日なたぼっこをしていた日高地方の冬。C11が貨車を従え駆け抜けて行った。



Sと鉄橋

北海道 根室本線 釧路〜東釧路

この日、釧路川には流水が流れて来た。私もC58と一緒に来て見た。



流水

北海道 釧網本線 北浜から浜小清水

オホーツク海にアムール川のように流水が広がっていた。
流水にのつての撮影。命がいくつあっても足りないと感じた。

凍つく朝

北海道 根室本線 別保～上尾幌

凍てつく冬が鉄路をおそった。それにもめげず放物線のような白い煙を吐いて走って行った。



冬の斜里岳

北海道 釧網本線 斜里～中斜里

斜里岳のふもとC58が走って来た。雪に埋もれた冬の道。



流水の海

北海道 根室本線 落石く別当賣
冬を飾る流水鉄路をゆくSL。このヒーローは雪と流水とSLか。





冬の峠道

北海道 石北本線 金華〜常紋 (信)

山あいに汽笛が轟き、大地をゆるがす長い貨物を引くD51にとって冬の鉄路はきびしい。



大湿原

北海道 釧網本線 茅沼く塘路

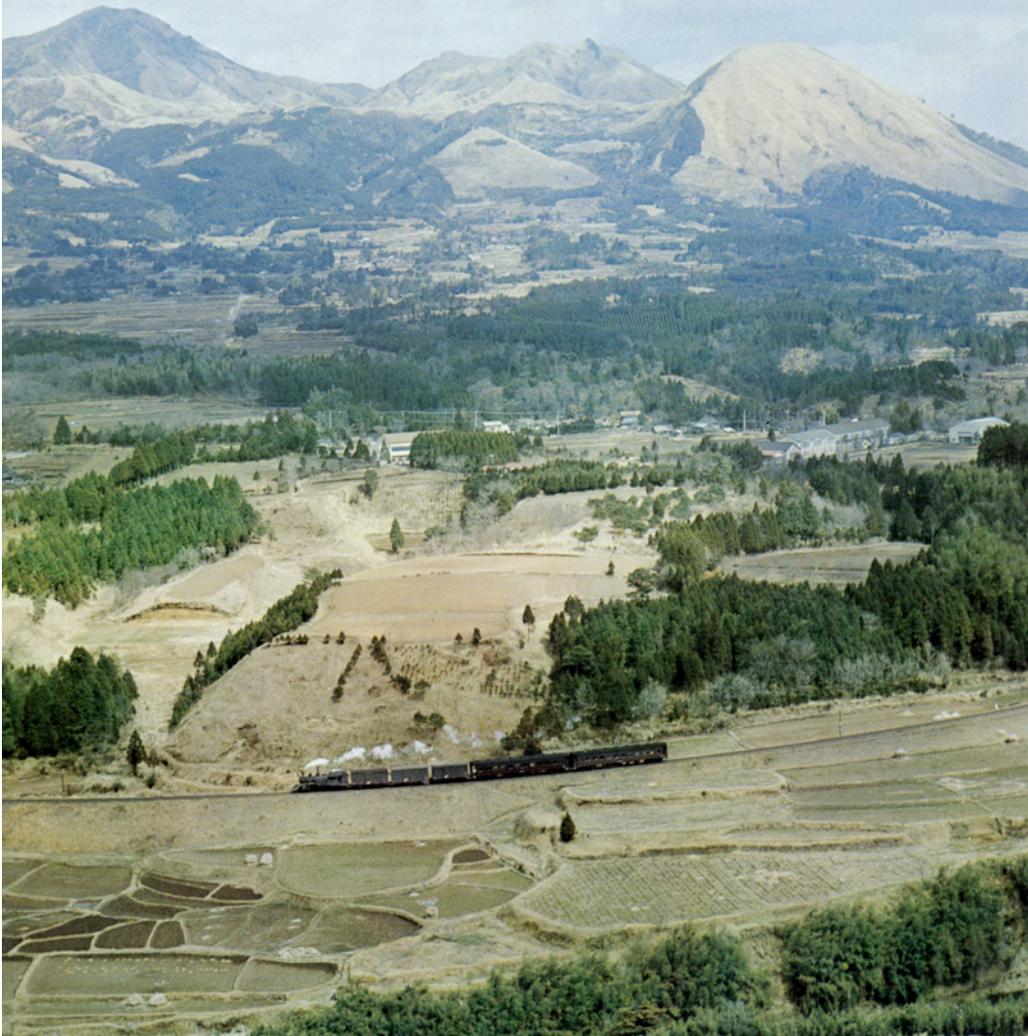
釧路湿原に広がる雄大な景色。人間より大きいS11もここでは小さく見える。

晴れ姿

北海道 根室本線 落石く別当賀

枯れ草に雪がふんわりと乗っていた。そこを歩くと足あとがついた。
だから回り道をした。





南郷谷

九州 高森線 立野〜長陽
阿蘇山のふもと立野目指してC12が走ってゆく、
転がるように走ってゆく。

日南の海

九州 日南線 南郷〜大堂津

いくつもの小島が点在する日南海岸C11にとってもこの日南地方の冬は日中暖かった。





のどかな風景

九州 日豊本線 田野〜日向峯掛
峠を越えて来たC57が宮崎目指して力走する。



山並みについて

北海道 瀬棚線 茶屋川く美利河

私は登った。ひたすら登った。この一本の列車を撮るためにひたすら登った。そしてC11は来た。

利尻富士

北海道 宗谷本線 南稚内〜抜海
はるか彼方にうっすらと利尻富士が見えた。海近く9600が走ってゆく。



雪景色

北海道 夕張線 川端く滝ノ上
氷のはった川の中央から撮影

夏に又その場所を見た時、そこは舟で行かなければならない所だった。





岬

北海道 興浜北線 斜内〜目梨泊

S1におおいかぶさるようにそびえ立つ山があつて、その名は北見神威岬と呼ばれていた。



冬の湿原を行くC58

北海道 釧網本線 茅沼く塘路

釧路湿原に行く混合列車は、素晴らしい山々が拍手を送っているかのように見えた。



その日射しを浴びて

北海道 根室本線 厚岸ノ糸魚沢

朝日を浴びてC58は快走する。冷たい空気にあたりながら快走する。



幸せ行きのSLが行く
北海道 広尾線 幸福駅にて

「愛の国から幸福へ」落ち葉松バックに幸せ行きのSLが走ってゆく。



C 58の走る冬の道

東北 陸羽東線 羽前赤羽～堺田

C 58が2台で力を合わせて貨物列車を引いてゆく。



一番列車

九州 日豊本線 青井岳駅にて

ひっそりとした山間の駅にのろしのような煙が上がった。C 57 の出発である。



羊蹄山のふもとS.L.が行く 北海道 函館本線 小沢ノ倶知安
冬であっても太陽がカンカンと照りつける中での撮影は汗が水のように出てつらい。
羊蹄山バックに走るD51にとってもつらい仕事であろう。



雪の峠道

北海道 留萌本線 恵比島く峠下

降りしきる雪をついてD61がダッシュする。きびしさ残る冬の峠道。

C11の正月

九州 日南線 伊比井〜北郷

日南地方にも正月が来た。

正月が来たとはばかりにC11の汽笛が鳴いたようだった。





ワラブキ屋根

東北 会津線 湯野上〜弥五島

ひっそりと立っているワラブキ屋根の家。
C11もひっそりと走った。



冬の海岸線

北海道 羽幌線 力屋〜小丹別

山間の中に海が見えていた。ガンバッテ走るSLの姿も見えた。



大雪原

北海道 深名線 天塩弥生ノ北母子里

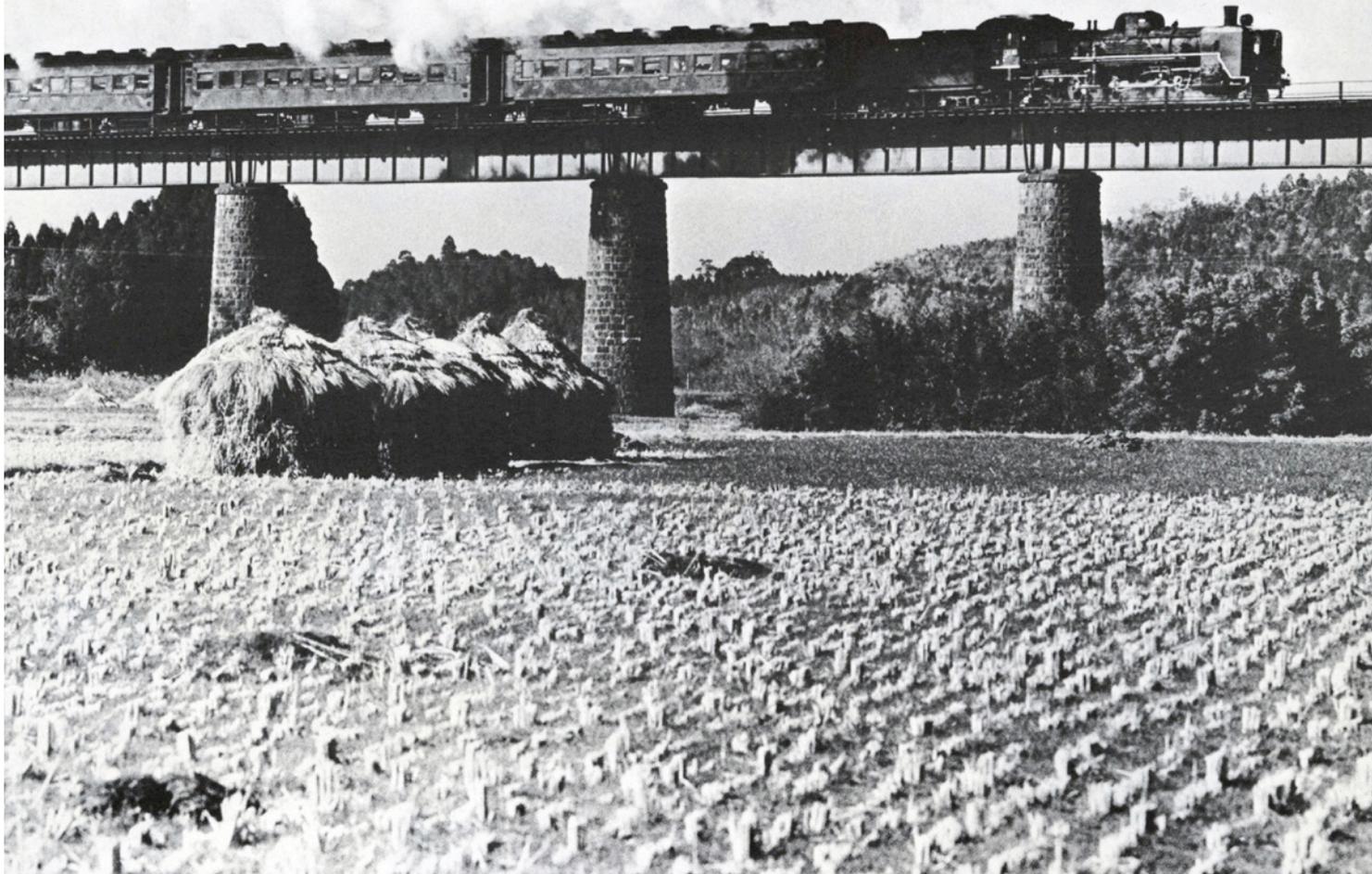
クリスマスを思わせるような木々がたくさん点在していた。
峠を越えて来た9600は転がるように走ってゆく。

硫黄山とSL

北海道 釧網本線 川湯く緑

荒れた岩はだを見せる硫黄山のふもとにC58が駅をあとに峠を目指す。

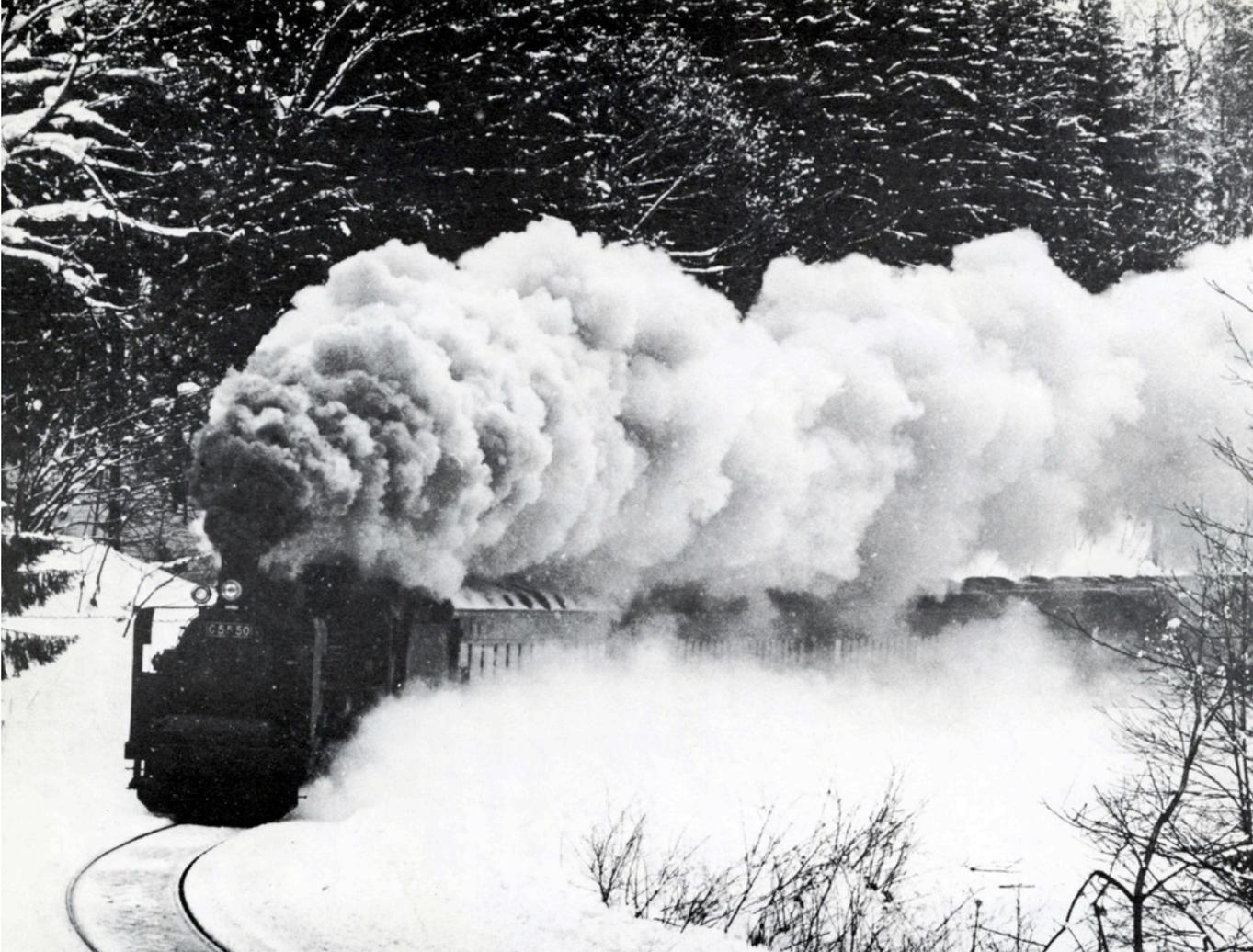




客車列車

九州 日豊本線 山之口〜楠ヶ岡(信)

稲刈りを済ませた鉄橋の上をC57の引く客車が日の光をサンサンと浴びて走って行く。



塩狩峠

北海道 宗谷本線 蘭留～塩狩

木々に積もった雪がなんとも言えず撮る。
数少ない客車列車を写す一瞬の出来事だった



雪の降る鉄路

東北 只見線 滝谷駅にて

雪の降りしきる滝谷駅発車。その名はシーチヨンチヨン。



慕進

北海道 室蘭本線 栗岡～栗山

この区間はとても列車本数が多い所でフィルム一本軽く使ってしまいそうだった。
雪が降りしきっていたので煙の出具合も一段とよかった。



湿地帯

北海道 釧網本線 畑岡〜遠矢

C58の引く混合列車が釧路湿原を走ってゆく。



会津雪景色

東北 会津線 桑原く湯野上

画に描いたような寸景にC11が飛び出てきてはトンネルの中に消えていった。



常紋峠

北海道 石北本線 金華～常紋(信)

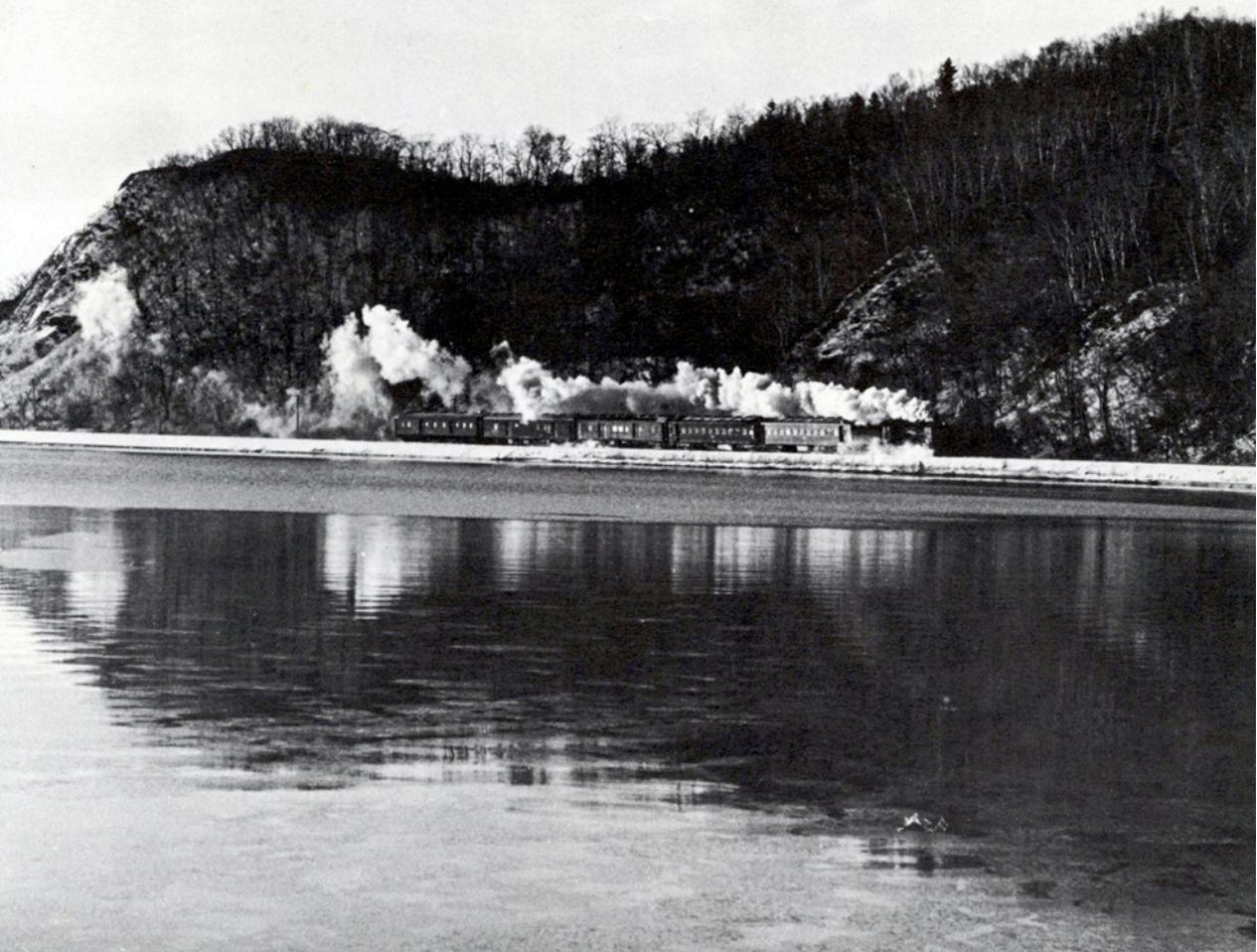
春の訪れを待つ北海道D51は霧進を続ける。



降りしきる雪

東北 只見線 滝谷駅にて

空が灰色になったかと思うと一瞬のうちに雪が降って来た。



朝に輝く

北海道 根室本線 厚岸～糸魚沢

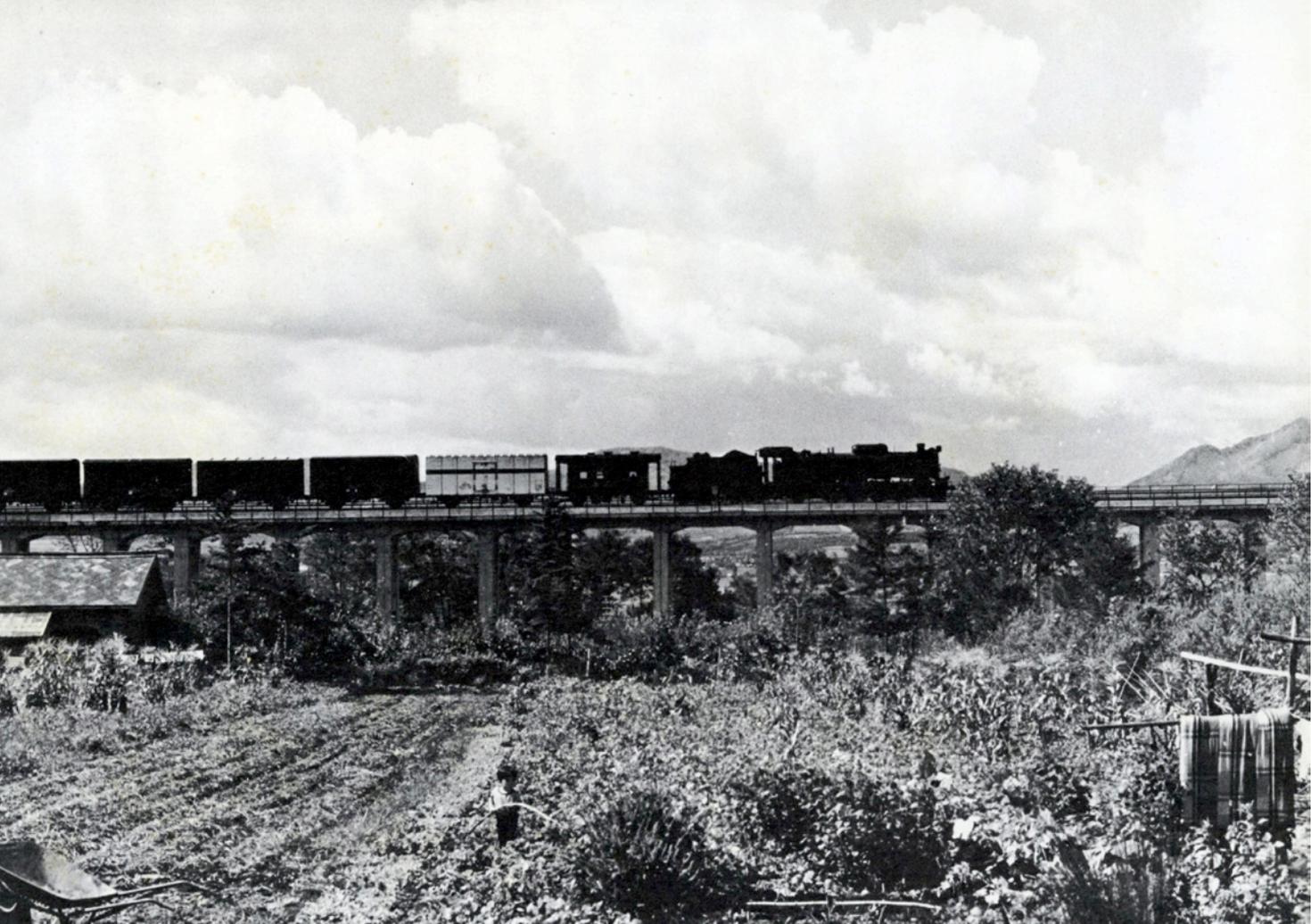
朝日に照らし出されたC58が海辺に影を落として走ってゆく。

山間部

関西 信楽線 貴生川く雲井

短い編成ではあったが、 ∞ %の勾配の前には息も途切れがちだった。





新線を走るD51

北海道 函館本線 七飯〜渡島大野

ふだんから見なれたSLが走ってゆくので見向きもしない子供がいた。
D51もよそを見ているようだった。



溪谷を行く

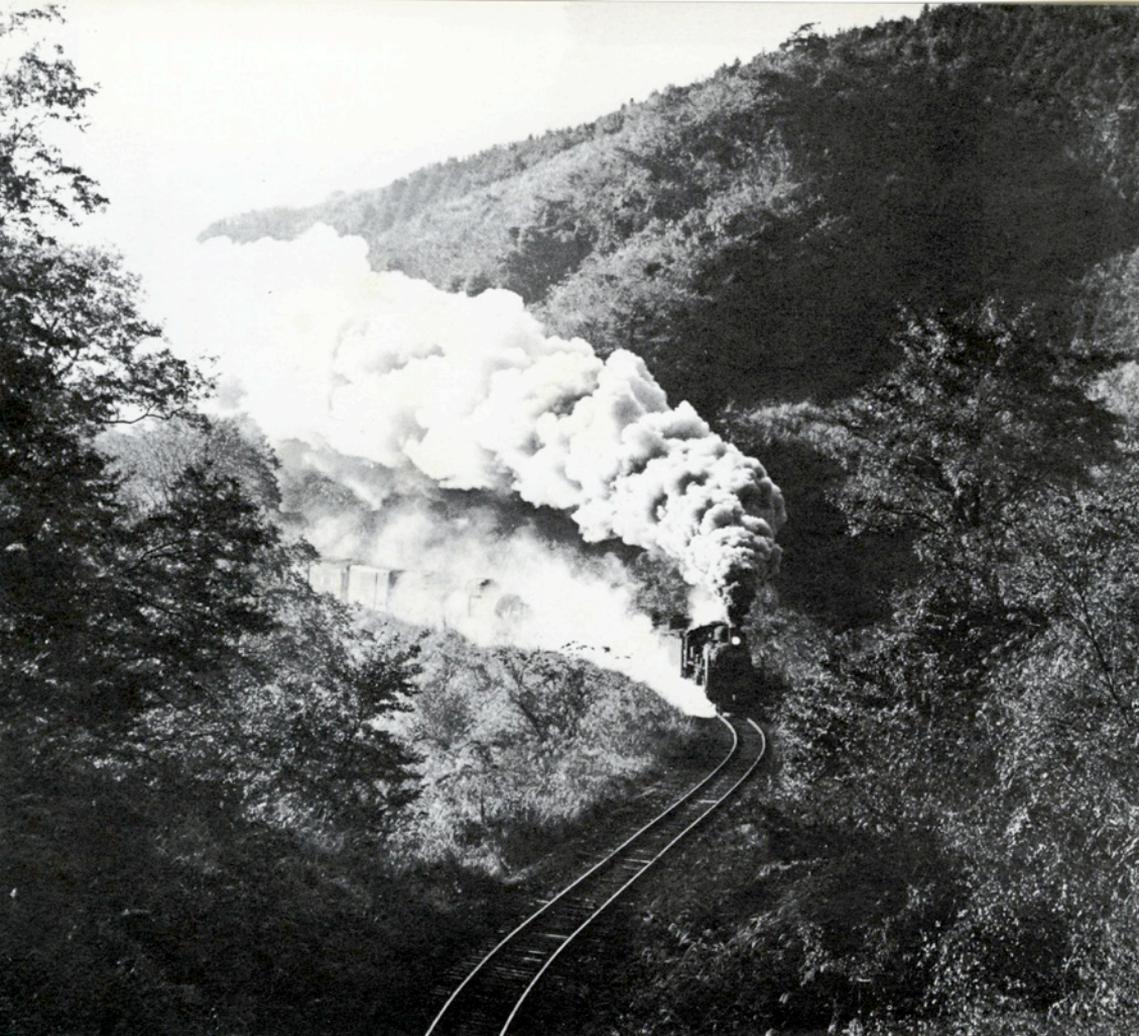
九州 高森線 立野〜長陽

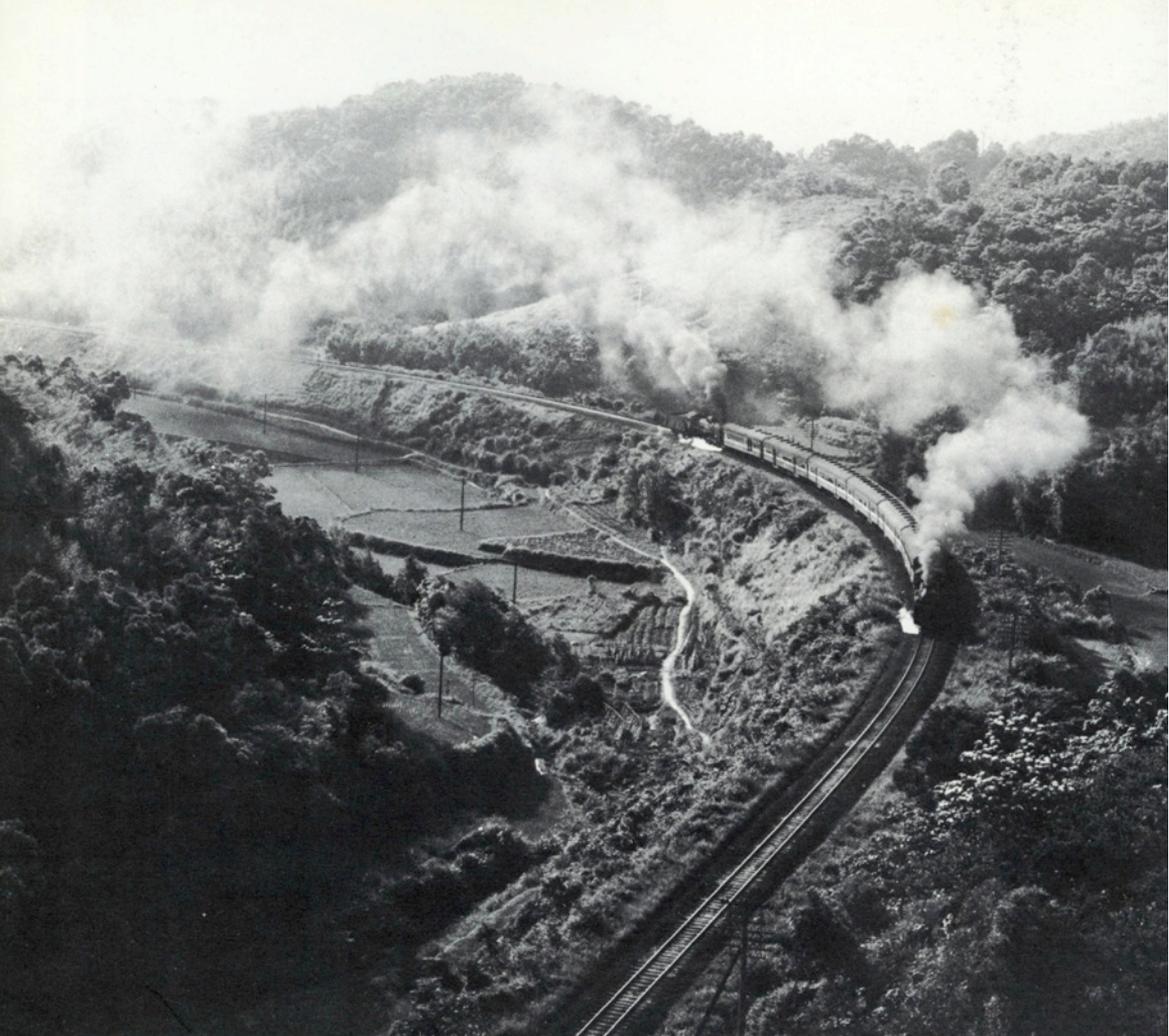
阿蘇のふもと南郷谷を渡るC12 吐く息も白く、川の流れも静かに！

峠の朝

九州 日豊本線 青井岳く桶ヶ丘(信)

朝の日射しを一杯に浴びて走るC57この先トンネルがいくつも待っている。





峠越え

台湾 縦貫線 豊富～苗栗

25%の勾配に補機の力を借りて峠を越えてゆく



深夜の機関区

北海道 名寄機関区

宗谷本線の一仕事を終えて一人になったD51

あとがき

幾度となく、ひまが許す限り、日本の角々迄出かけて行っては、無我無中でシャッターを切ってきたSLの走る道、鉄路。

三脚にカメラを3台も4台も乗せて構図を決め、やって来るSLがカメラのフレームに入ると、緊張した面持ちでレリーズのボタンを押した日々。

それが終ると、仕事の待っている職場へ戻って行く。また出かける。写真を撮るこの単純な繰り返しの生活が、6年近く続いた。そのために途中で無理をしたため、病気(食事3回の所を1回に減らしてフィルム代に回した事が原因で)になった事もあったが、とにかくよく行った。

私の住んでいた大宮は、時間的・地理的に北へ行くにも、南に行くのにも、とても都合よかった。そのせいか、6年の間に九州の地をふんだのが74回、北海道へ54回、ましてや中国地方にある伯備線へは、通算して12回も行った事があった。

写真的な技術が無知な私にとって、人様の前に出して見せる様な写真は1枚もないので

あるが…………。

ここに出版の運びとなった大それた原因の背景には、自分なりに努力、工夫をして来たという自負があるからに過ぎない。

写真を撮り終えて帰途に着く列車の中では、たえず次の撮影目的地の列車運行状態や、撮影場所などを、いろいろなガイドや時刻表で調べたりした。

やって来るSLのシャッターチャンスをつかむために近くの線路へ行き、国電にフィルムのはいっていないカメラを向けては、無邪気な顔をしてシャッターを押したりした事もあった。だから1日に1列車しかこない線区でじっと待ち、SLが来た時無性の喜びを感じるのである。だが、長い年月の中には失敗も多い。例えば、フィルムを巻き忘れたカメラのシャッターが切れず、茫然と立ちつくしていた事もあった。

回想するにつけて思い出も尽きないが、いろいろな思い出の写真を乗せたSLの本を出す計画をしたのは、今から3年ぐらい前であった。だが、SL撮影に行きながらの写真

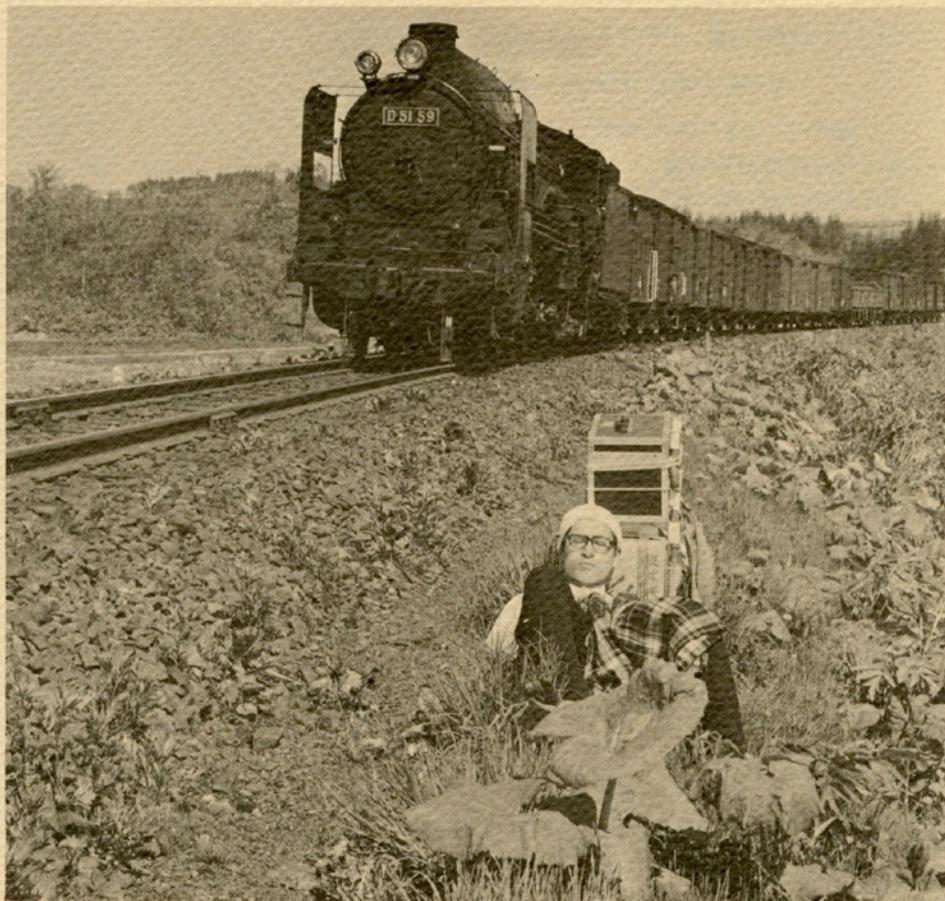
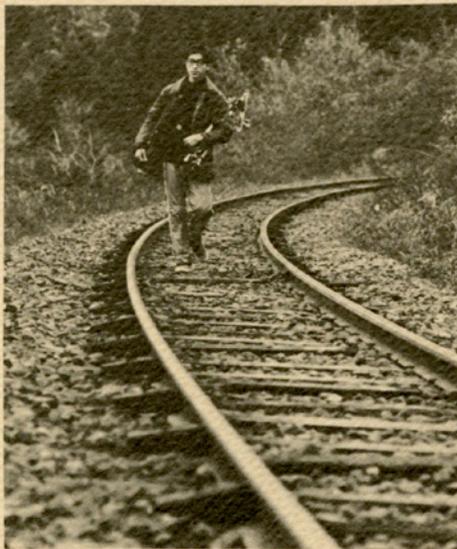
集出版となると、もっといい写真を撮って来たら本に乗せようと思いつつも、とうとうSL牽引最後の列車が、室蘭本線に走ってしまったのである。

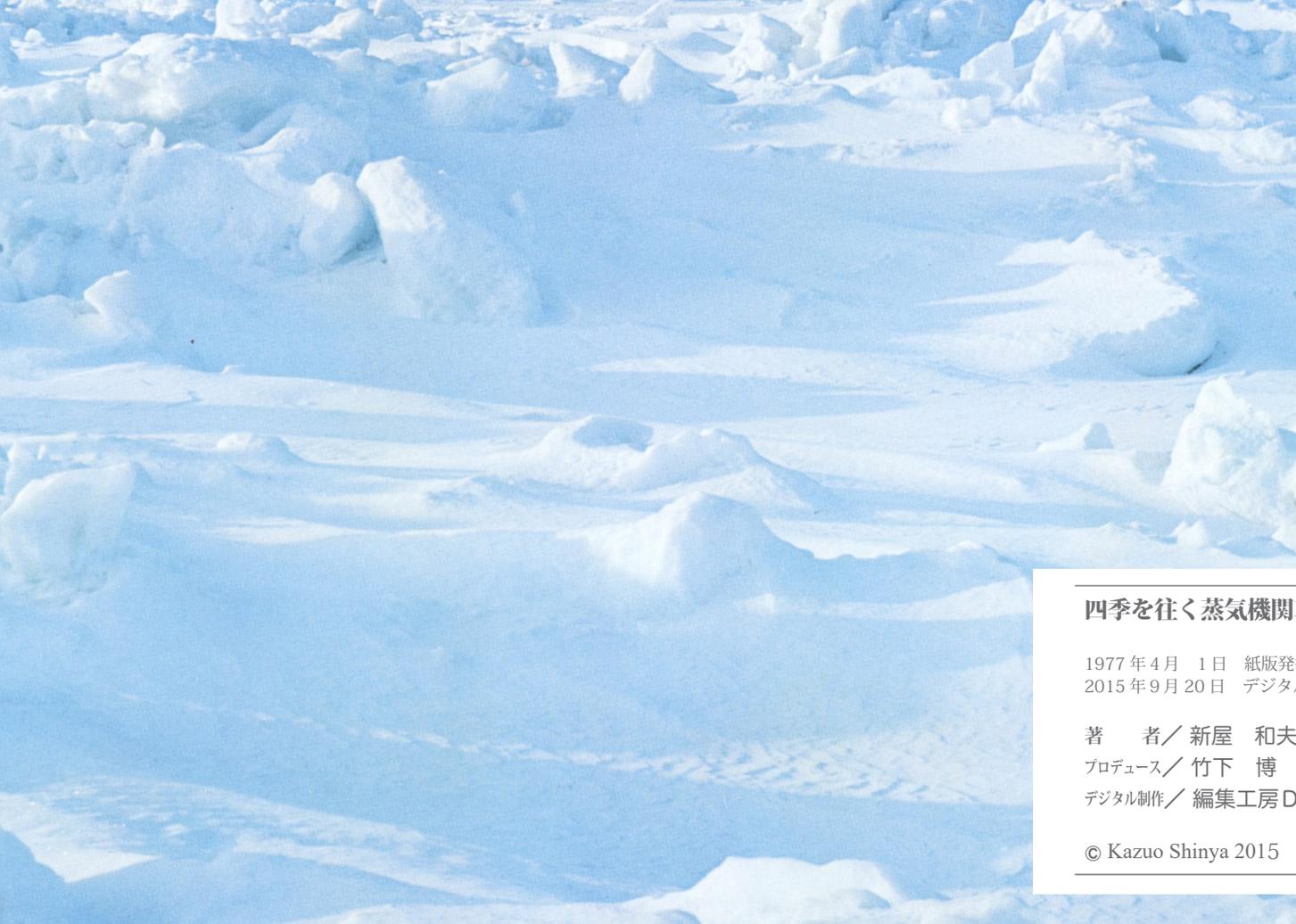
それから企画・編集・プリントを行なった訳であるが、この中でやはり数多いネガ(約1万枚)の中から、どれを載せるか選択に手間どってしまい、とうとう時期はずれの出版になってしまった。

しかし、SLを心の底からこよなく愛し、人間の作った機械の中で最も人間らしいSLを大好きな私にとって、この写真集を見てくれた人々に、多少なりとも賛同を得られた事と理解し、心の底から感謝申し上げますと共に、この写真集を大事に保存して下さるよう、切にお願い申し上げます。

最後に、影になり、日なたになりして協力して下さった吉田克実氏、林繁伸氏、田中悦夫氏には、心から感謝いたす次第であります。

1976年12月25日





四季を往く蒸気機関車・冬編

1977年4月 1日 紙版発行
2015年9月20日 デジタル版発行

著 者／新屋 和夫
プロデュース／竹下 博
デジタル制作／編集工房DEP

© Kazuo Shinya 2015
